ベトナムにルーツを持つ子どもたち
～阪大ふくふくセンター設立一周年に寄せて～

海外交流

近　藤　美　佳*

Looking Back on Memories with Children with Vietnamese Roots in Japan
on the First Anniversary of the Establishment of the DERC
(Diversity and Community Engagement Research Center)

Key Words：Vietnam, Vietnamese people in Japan, Children with Vietnamese roots

0．はじめに

2023年4月1日、大阪大学大学院人文学研究科附属複言語・複文化共存社会研究センター（通称、阪大ふくふくセンター、以下センターと略す。）が発足した。本センターは大阪大学箕面キャンパス＝Osaka University Global Campusに属す一組織であるが、この箕面キャンパスは、世界の言語とそれを基底とする文化の研究拠点である。これを活かして日本で学び育つ外国にルーツを持つ子どもたちの支援のために貢献し、地域社会ひいては日本全国における課題解決に取り組む環境を整備することをセンターは目指している。センター設立の背景や設立までの経緯、設立初年度における支援活動等の協働実績報告や、センターの活動の基盤となる複数言語環境に育つ子どものための教育理論については、『EX ORIENTE』第28号（2024年）「特集：阪大ふくふくセンターの使命と可能性」にまとめている。センターの初年度の活動についての“公的な振り返り”は既にそちらで行っているので、本稿ではこの場をお借りして、わたしがこれまで出会ってきたベトナムにルーツを持つ子どもたちについて、“私的な振り返り”をしてみたいと思う。

1．ベトナムにルーツを持つ子どもたちとの出会い

わたしが「ベトナムにルーツを持つ子どもたち」と出会ったのは2008年のことであった。当時、大阪外国語大学の学部生であり、ベトナム・ハノイでの1年間の語学留学を終えて帰国したばかりのわたしは、強烈な“ベトナムロス”に陥っていた。この頃はまだ日本に暮らすベトナム人の数も現在のように多くはなく、ベトナム料理店やベトナム食材店も数えるほどしかなかった。そんな中、大阪府内のベトナム人集住地区に位置するある公立小学校が、ベトナム語母語教室の学生ボランティアを募集しているという情報を、清水政明先生（現在、大阪大学大学院人文学研究科教授）よりいただいた。もとより子どもが好きだったこともあり、これはまたとない機会と飛びついたのだった。

当時のわたしに、「ベトナムにルーツを持つ子どもたち」という響きは大変魅力的に響いた。日本とベトナムを行き来する子どもたち、日本の小学校に通いながらも、家に帰ればベトナム語やベトナム料理が待っている子どもたちを、心から羨ましいと思った。ところが、期待を胸に教室に飛び込んだわたしを迎えたのは、子どもたちの憎悪に満ちたまなざしや、数々の罵詈雑言であった。「なんでベトナム語なんかやらなあかんねん」「こんな教室来ても意味ないわ」、そのとき聞いた子どもたちの台詞は、今でも鮮明に頭の中に蘇る。しかし、子どもたちと関係を築いていく中で、自分が立つ複数言語・複数文化環境に対してそれぞれの子どもたちが感じている複雑な気持ちや、子どもたちにそのような気持ちを抱かせる社会的な要因のようなものがだんだん見えてきた。

この経験以来、母語支援員、日本語指導員、教育サポーター等々、いろいろな名称で呼ばれながら、ベトナムにルーツを持つ子どもたちが過ごす学校現

* Mika KONDO
1987年1月生まれ
京都大学大学院　人間・環境学研究科
博士後期課程修了（2017年）
現在、大阪大学大学院　人文学研究科
外国学専攻　講師
博士（人間・環境学）
TEL：072-730-5391
FAX：072-730-5391
E-mail：m_kondo.hmt@osaka-u.ac.jp

場に継続的に関わるようになったのである。

2．日本生まれの子どもたち

2－1．集住地域の子どもたち

現在日本にあるベトナム人集住地域の多くは、インドシナ難民たちが集住し、コミュニティを形成してきた地域である。こうした地域の学校に通う子どもたちの中には、生まれたときから日本の文化や生活習慣に慣れ親しんでおり、どちらかといえば家庭や地域に在るベトナムらしさの方に違和感を覚えるような子どもも少なくない。母語教室に来ること自体が自分が「他者と異なること」の表明になる、母語教室では自分が苦手な言語にわざわざ向き合わなければならない、母語・母文化に親しみを感じられない等、いろいろな思いから、母語教室に来ることに抵抗を感じる。それなのに、国際理解教育の時間や多文化フェスティバル等のイベントでは、その国の代表としての振る舞いを求められる…。こうした子どもたちとともに学ぶには、まずは子どもたちが抱える葛藤を知り、受け止め、解きほぐすことが必要であった。たとえひとつの小学校において「ベトナムにルーツを持つ」という共通項を以て集められた子どもたちの間でも、ベトナムの言語や文化を日常的に感じる度合いは子どもによって大きく異なるし、ひとりの子どもの中でも時の経過に伴って変化し得る。そうした子どもたちの多様性・多層性を無視してはならない。

子どもたちの「やりたいこと」「すきなこと」を引き出し、それが教室の中で実現できる用意を整える。そこにベトナム語やベトナム文化の要素を乗せることができれば、子どもたちは安心して、楽しく学べるようになる。例えばA小学校ではここ数年、従来行ってきたベトナム獅子舞にV-POPダンスを組み合わせた演目を披露している。今では、12月のイベントに向けて子どもたちが4月から選曲を始めるほど、子どもたちの自主性が光る取り組みとなっている。

2－2．散在地域の子どもたち

散在地域となると、ある学校に在籍するベトナム人児童が1人ということも少なくない。そのような学校だと、前項で紹介した発表会などのような活動は若干やりづらくなるものの、ひとりひとりの環境や能力、好みに合わせた指導ができるというメリットがある。

図1：ベトナム獅子舞とV-POPダンスを披露する子どもたち

例えば、B小学校に通うVさんは、「日本語がきちんとできればそれでよい」という教育方針の家庭に育ち、家庭内でも両親同士の会話以外は全て日本語だった。そのためVさんは当初ベトナム語に強い苦手意識があり、母語学習にあまり積極的になれずにいた。Vさんは音楽が得意だったため、授業ではよくベトナム語の歌を題材にした。父の日に歌をサプライズプレゼントしようと歌の練習をしたり、卒業を目前に控えた全校集会でベトナムの卒業ソングをピアノで演奏して披露したりした。Vさんは、ベトナム語の力だけを見れば「日常会話ができる」という程度にも到達しなかったが、ベトナム文化についての学習は、小学校卒業まで楽しんで取り組み続けることができた。

C中学校のHさんは、家庭内ではベトナム語を主に使用する家庭に育ち、小学校入学時には日常的な会話ができる力があった。好奇心旺盛で興味関心の幅が広いHさんとは、子ども向けの科学の本をベトナム語で読む学習を重ね、小学校高学年の頃には支援を受ければ簡単な文章の読み書きができるようになっていた。中学校では、学校で学んだ日本の地理と歴史の知識をベースにしながら、ベトナム語の文章を読んでベトナムの地理と歴史について学ぶ活動を行った。中学3年次の最後の授業で、自身の9年間のベトナム語学習を振り返ってどう感じるかと尋ねると、「前は、日本語で考えたことを頭の中でベトナム語に翻訳してから話していたけど、最近はベトナム語で考えたことがそのまま出てくるよう

になった気がする」と語った。

3．直接転入の子どもたち

2010年代に入ると、在日ベトナム人の数が急増し、それに伴ってベトナムから直接転入してくる子どもたちと接する機会が増えた。

直接転入の子どもたちは、ある一定の年齢までをベトナムで過ごし、日本語も日本文化も何もわからないまま、日本の学校に放り込まれてくる。学生当時、学校現場に支援員として派遣されたわたしは、「日本語を教えてください」「授業内容を通訳してください」「ベトナム語でおしゃべりをして、不安を和らげてあげてください」等という指示を受け、子どもたちに対応することになった。こうした対応は一見、手厚い支援、十分な配慮のように思えたが、わたしはこうした仕事をこなしながら、学校の中にぽつんとある離れ小島に子どもと一緒に取り残されているような気分をいつも感じていた。子どもたちがベトナム語を使って語る豊かな世界を、わたししかわかってあげられないのが悔しかったし、子どもたちがベトナムで培ってきたさまざまな経験が、日本の学校では拾い上げられる機会がなかなかなく、まるでなかったものになってしまうことが悲しかった。

こうした子どもたちの持つ複数言語・複数文化の力が原学級の中でも発揮されるようになるための整備を急がねばならないと切に思う。

4．ベトナム語を学ぶ学生と、ベトナムにルーツを持つ子どもたちとの出会いの後方で

2020年に大阪大学に着任してからは、わたし自身が学校現場に入り込み、子どもたちと直接触れ合う機会は減らさざるを得なくなった。その代わり、大阪大学外国語学部でベトナム語を学ぶ学生を、ベトナム語支援を必要とする現場に繋ぐようになった。わたし自身が子どもたちと接する中で多くのものを得てきたように、学生たちにとっても子どもたちとの出会いがきっと貴重な経験になると信じていたからである。折しも時はコロナ禍。留学をやむなく諦め、国内にベトナム語実践の場を求めた学生たちもおり、複数人の学生を学校現場に紹介することができた。学生たちは、子どもたちの可愛らしさや保護者の方の温かさに感動を覚えつつも、支援活動の中でさまざまな困難や葛藤に直面する。しかし、最終的にはそれらを乗り越え、たくさんの学びや気づきを得る学生が多く、そんな姿を頼もしく感じながら見守っている。

図2：小学生にベトナム紹介をするメディエーター

5．おわりに

2023年4月、阪大ふくふくセンターが発足、その兼任委員を拝命した。阪大ふくふくセンターは、大阪大学で言語や文化について学び、その知識や技能を社会のために活かしたいと願う学生・卒業生・教職員を、異なる立場にいる人々の間を仲介する「メディエーター」として登録し、支援を必要とする外国にルーツを持つ子どもたちが過ごす現場に繋ぐ。そして、メディエーターと子どもたちが相互によりよく学ぶことができるよう、各現場が協働して課題解決に取り組む環境を醸成することを目指す。

わたし自身が、子どもたちとの関わりを機に、ベトナム語やベトナム文化への理解を深め、複数の言語・文化を仲介する訓練を積んできた。子どもたちと視線を合わせることによって、これまでとは異なる視点から日本社会を見つめ直すことができたり、日本に暮らすマジョリティとしての自分の傲慢さや暴力性に気が付くことができたりもした。子どもたちからは、常に大切なことを教えてもらっている。こうした経験を持つ身として、これからも外国語を学ぶ学生たちと日本で学び育つ外国にルーツを持つ子どもたちとの出会いを創り、双方がともに学び合える環境づくりを、センターを通して行っていくことができれば幸いである。